

武蔵野日曜聖書講筵

人生の歌

——詩篇第23篇——

1973年7月8日

小池辰雄

ヤーヴェーこそはわが牧人 若草の野・憩いの水汀 死の陰の谷を渉るとも ロングフェロー
の「サムオブライフ」 わが酒杯は溢るるばかり

●ヤーヴェーこそはわが牧人

今日は詩篇の第23篇、「人生の歌」と題しました。詩篇150篇のうちでもし「一つを選べ」と言ったら、この詩篇23篇を出さざるを得ないでしょうね。それくらい詩篇の中の最も代表的なものです。非常に短い。大抵いいものは、むしろこういった短いものにあると言ってもいいくらいです。

詩篇23篇それから46篇などは双璧といった方がいい。46篇は世界史的な背景をもった非常に終末的な詩篇です。マルチン・ルターの宗教改革の進軍の歌になったのは46篇です。23篇は本当に個人的な意味で——もちろんこれは民族的なイスラエル民族の在り方を非常によく表しているんですが——同時に個人の人生そのものを映しだしている。「ダビデの歌」とありますが、ダビデが果して作ったかは、学問的には決定できません。

私は自分の訳がありますので、それを読みながらいきます。

1 ヤーヴェーこそはわが牧人

私は何も困らない。

2 若草の野に彼は私を臥させ、

憩いの水汀みぎわに伴れゆき給う。

3 わが魂を彼は甦よみがえらせ、

義ただしき道に導き給う、聖名みなのゆえにこそ。

4 また縦たどい死の陰の谷を渉わたるとも私は禍害わざわいを恐れない。

あなたが共に在り給うから。

君しもとが笞、君が杖、それらが私を慰めるから。

5 あなたはわが眼まのあたりに筵えんを設け給う、

わが諸々もろの敵を前にして。

あなたはわが首くちうべを油で滴したたらせしめ給う、

わが酒杯ひかずみは溢るるばかり。



6 誠さいわいに善福めぐみと恩恵いのちとが私を追う、
わが生命の日のある限り。

かくて私はヤーヴェーの家に住むであろう、

日に日が続き果てるまで。

これが原文に忠実な訳です。原文はもちろんヘブライ語ですが、非常に力強い詩です。こういう詩篇を読むと、解説なんかあまりする気が起きない。一節一節が非常に深い内容を持っている。

「ヤーヴェーこそはわが牧人まきびと、私は何も困らない。

この詩を見ると、今訳したように、二人称で呼びかけている。ただ一番先に、「あなたは」と言わないで、「ヤーヴェーは」と言つて神の名を読んでいるわけですが、この調子から言いますと、この「ヤーヴェーこそは」という言葉は、ほとんど「あなたこそは」と同じ響きを持っています。ご承知のとおり、イスラエルの民は遊牧の民ですから、ダビデ自身が牧人たる経験を持っています、牧羊者であつたから。私はこれはダビデの原作であると思つて差し支えないと思う。彼が詩人であるということはちゃんと旧約の中に書いてある。

羊は牧者に全的な信頼をして歩いている動物です。神に全的な信頼をもつて歩くのが人生の本当の姿である。だから、

「ヤーヴェーの神、あなたこそは私の牧者である」

と。「ヤーヴェー」というヘブライ語は、「存在する」という、

「ザ ビーイング」「本当に存在している者、実在している者」

あるいはもう少し実存的にいうと、

「実存している者」

ということ。ここにコップがあるが、コップがあるよりも、もつとはつきりと生きて存在しているもの。

「存在する」という字と、「生きている」という字とが実に似た字なので、「存在する」は「ハーヤー」という字ですけれども、「生きる」という字は「ハッヤー」といつて、「H」の「ハー」の発音が強くなると「生きる」という字になる。「生きている」ということと「在る」ということが、ヘブライ人においては非常に近い、発音の上からも、大変おもしろい言葉です。

「実在者であるヤーヴェーこそは私の牧人で、私は全然、信頼しているんだ」

と。まことに法然上人や親鸞上人というものは阿弥陀さんに完全に任せきつている。ちょうど、

「ヤーヴェーこそはわが牧者なり」

というのと同じ境地なんです。だから、

「ヤーヴェーよ、神よ」

と呼ぶことと、



「南無阿弥陀仏」

と称うことは全く質的に同じものを持つているわけです。「南無阿弥陀仏」と称えば、もうそれで一切が解決している。それと同じように、

「なんじヤーヴェーよ」

と叫べば、それで一切がもう解決済みというわけです。

解決しないで解決しているという世界が一番本当に強い。人間的な相対的な現実で、解決しなければ事が済まないような気持ちだったら、それは百年たつても死に至るまでどうにもならん。いつも問題を完全に呑み込んでしまつて、もう一つ奥の世界でそれを支配することにならなければダメなんです。

人生にはいろんな問題が次から次へと、これがおさまつたらまたやつてくる。ちょうど空の雲みたいなのですから、

「ああ、今日は晴れた」

なんて思うと、また雲がやつてくる。そういうわけで、運命環境でもつて支配されているうちは結局、運命環境に支配されてその人はおしまい。

運命環境を自由にこちらが支配する。それが本当の「自主」ということ。「自主、自主」なんていう言葉を使うけれども、本当の自主の世界を知らないですよ、みんな。実は、神さまに本当に任せている人こそ本当の自主の人なんです。青年にそういうことを言うと、「任せる」と言うと、何か意気地がないように思うけれども、とんでもない。本当の力はこの絶対のところから来るんですから。

「ヤーヴェーこそはわが牧人なり」
まきひと

と、こう告白する人は、全的に信賴していることで、実は本当の大平安を持つている。相手が絶対者ですから。相手は絶対者なんですから、絶対者に全託していれば、こちらに絶対の質がやつてくる。相対でありながら、絶対のものが来ている。

「有限にして無限を懷く、これを哲学という」

と、あの有名な岩本先生が――高の有名な岩本先生というのがいた――開口一番にそう言つたそうですが、この我々有限なるものは無限なるものを懷く。その心根が本当の哲学精神だという。宗教にいたつてはもつとそれが素晴らしい意味で、そうです。哲学もそれだけの実を持つた哲学ならいいですけども、そうでない哲学が多い。

「ヤーヴェーこそはわが牧人、私は何も困らない」

と。困つても困らない。「武士は食わねど高楊枝」たかようじというやつ。

「困るだろうか、こういう場合には困りそうだ」

とかね、そういう分析している人はいつまでたつても本当の在り方はできない。

「困ろうが困らない」

ということ。今はすぐ賃金を計算して賃金闘争なんてやつているのは、およそ宗教の世界



とはちがう。

本当はそういうところに境地が入ると、ああいう問題ももつと楽に解けていく。お互いに譲るし、お互いに辛抱もするし。そういうのでなくて、もう主張ばかりして、一分でも歩合のいいことを望んでストライキをやってみたり、もう情けない世の中です。大体、学校の先生までもだいぶそういう気持ちに、

「ボーナスが何割だ、何割何分だ、そつちのが良さそうだ」

とか、下らないことばかり言っている。

それが、

「私は何も困らない」

ということ。藤井先生は私たちに言いました。

「本当に真理を生きようとしたら、飢え死にしたっていいじゃないか」

と。それだけの覚悟で先生は生きていた。先生が亡くなった時は過不足なしですよ。ガマガチの中に何も無い。借金もなければ貯えもない。本当に藤井先生という人はそういう信頼生活をしていた人です。先生の全集が出たら、お子さんたちの生活費が出たというようなわけです。藤井先生という人は私のただ一人の恩師ですが、身をもつて真理を証した。藤井先生のこの詩篇23篇の解説もありますから、是非読んで見てください。〔註… 藤井武全集第4巻／詩篇／「エホバは我が牧者なり」

「ヤーヴェーこそはわが牧者、牧人、私は何も困らない」と……

「私は何も困らない」

という。困つても困らないんです、本当に。私はある伝道者の話を直にその人から聞きましてけれども、本当にこれは祈りの伝道者です。正直、食うものがなくなってしまうんです、時々。そうすると、

「祈つていると、誰かがお金を置いていたり、お米を置いていたりする。不思議

議ではない」

と言っていました。何も連絡もしないんだけど、誰かがそれを置いていく。そういう伝道者は本当の伝道している人です。私のやつているこの日曜の講義なんて、これは片手間です。申し訳ない話で、こんなのは本当の伝道でも何でも無い。

●若草の野・憩いの水汀

2 若草の野に彼は私を臥させ、憩いの水汀に伴れゆき給う。

「緑の野」と「憩いの水汀」とは非常に美わしい光景です。人生には正にこのような天国的な、

「若草の野に彼は私を臥させ、憩いの水汀に伴れゆき給う」

という光景がある。



3 わが魂を彼は 甦^{よみがえ}らせ、義^{ただ}しき道に導き給う、聖名^{みな}のゆえにこそ。

この2節、3節が我々の人生における天国的な現実です。

「わが魂を彼は 甦^{よみがえ}らせ」

と、どんなに萎れても、また必ずそれを甦^{よみがえ}らせて、生き生きとさせてくださる。それが「若草の野、憩^{いこ}いの水汀^{みぎわ}」です。羊は若草が大好きだし、水がなければ生きていられませんから、この草と水というのは羊にとっては絶対に必要なものです。牧者は必ずそうやって次から次へと、野原と水を求めては旅をしている。そのように神さまは無くならないものをくださる。

「汝ら、思い煩うなかれ……」

というキリストの言葉がある通りです。

「聖名^{みな}のゆえにこそ、義^{ただ}しき道に導いてくださる」

人生のわけは、理由は、目的は、原因も目的も、これはみな

「聖名のゆえ」

です。仏さんの世界でいうと、「南無阿弥陀仏」とか「南無妙法蓮華経」なんです。

「南無阿弥陀仏のゆえに、南無妙法蓮華経のゆえに、法華経のゆえに」

というわけです。如来の称名、称号とも言いますが、この、

「聖名のゆえにこそ、ヤーヴェーの聖名にこそ」

と、聖名^{ただ}を称^{たた}えることが讃美することです。

「ハレルヤー」

というのは、

「汝らヤーヴェーの神を讃^ほめ称^{たた}えよ」

というのが「ハレルヤ」です。その「ヤーヴェー」というのが「聖名」ですから、このヤーヴェーの名のゆえにこそ義しいので、私のためではない。神さまの名のゆえにです。「何々の名において」という言い方がありますがね、「学校の名において」とかいろいろ、「団体の名において」とか。これが、

「ヤーヴェーの名において――あるいは、名のゆえにこそ――義^{ただ}しき道に導き給う」

ということ。だから、自分は道は知らないけれども、牧者が歩かせてくれる道がこの「義しい道」です。右へ行こうが左へ行こうが、たまには絶壁にぶつかろうが、必ず義しい道に導いてくださる。非常な平安をもつて、希望をもつて歩いているわけです。

●死の陰の谷を涉るとも

4 また縦^たい死の陰の谷を涉^{わた}るとも私は禍害^{わざわい}を恐れない。あなたが共に在り給

うから。君^{しもと}が筈^{しもと}、君^{しもと}が杖、それらが私を慰めるから。

ここに「筈^{しもと}」(シェーベト)という字がある。これは先端に鉄の金具が付いている。猛獣や



盗賊がやって来た時に牧者がそいつに立ち向かうための杖なんです。これが「筥」です。「杖」(ミシュエネト)の方は、羊が迷わないように、「こつちへ来い、あつちへ行け」と、羊の尻を叩いて導く杖なんです。だから、牧人は二つ持っている。敵を防ぐためのものと、導くためのものと。それが

「汝が筥、汝が杖」

ということ。それらが私を慰めてくださるから、そしてあなたがとにかくいつも一緒にいてくださるから、

「縦^{たと}い死の陰の谷を渉^{わた}るとも私は禍害^{わざわい}を恐れない」

「死の陰の谷」というのは、本当に暗い谷がある。絶壁があつて昼なお暗いような谷がある。あそこは岩石が多いからね。そうすると、その陰に盗賊が隠れていたり、野獣が隠れていたりする。そして急に襲いかかってくる。それが「死の陰の谷」という。へたすると死ぬから、殺されるから。

「でも、あなたが一緒に居て、そしてあなたの筥^{しもと}が、敵が来たらやつつけてくださ

るし、杖がまちがいなく導いてくださるから、私は禍害^{わざわい}を恐れない」

ということなんです。

この「死の陰の谷」という言葉を今度は、もつと人生でもって、いよいよ死を超えて次の世界に行くという、そういった死の谷を渡る時も、

「神さま、あなたが迎えてくださるから、死を恐れない」

という意味と、二つかかってくるわけですね。ですから、これは人生の、へたすると地獄的な現実――前の第2、3節は非常に明るい所ですが――第4節は非常に暗い所です。

私のあの兄貴「小池政美」も27歳で北京で仆れましたけれども、これは死の少し前に幻でキリストを見た。

「キリストが迎えに来られたから、白い衣を着て。だから、お母さん、私はお先に失礼します」

と、はつきりそう言ったそうです。これは私の兄貴もキリストに導かれて、死の陰の谷を渡ったわけです。祈りの世界というのは、深ければ深いほど素晴らしいことが起きてきます。仁戸田先生のお兄さんが亡くなられる少し前に、私はお見舞いして率直に福音のお話をした。私は祈って、非常に喜ばれました。それからあとで、自分が天国の園の中を歩いた――霊夢といいますか、霊幻といいますか――霊の幻の世界をはつきり見られたので、非常な喜びと希望に満ちて、そして凱旋された。これがこの、

「死の陰の谷を渉^{わた}るとも私は禍害^{わざわい}を恐れない。汝我と共に在^{いま}すから」

ということ。人生はもう、何を持っても――私はこの聖書を持っていきたいけれども、聖書も持っていくわけにいかない――全く手ぶらでもって次の世界に行く。手ぶらで行くんですが、ただ一つの持ち物がある。それはキリストの名です。



先程言ったその「南無阿弥陀仏」という称名。さすがは法然から教わったこの直実くまがいの（熊谷直実 1141～1207）は素晴らしいね。宿屋の主人に、

「わが最も大事なものを与える」

と言ったという。ちょうどあの使徒行伝のペテロのことを思い出す。

「わがうちにあるものを汝に与える。イエス・キリストの名によって歩め」

と言ったら、生まれつきの跛者が立つてしまったでしょ。

「イエス・キリストの名」

というのは実を持つているから、ペテロを通して、生まれながらの跛者が立つてしまったわけだな。それと同じように、口の中に「南無阿弥陀仏」を入れたという。

我々は聖書を、目で読んでいたらダメなんだ、これは口で読まなくては、食べてしまわなくては。聖書の文字を食べる羊みたいにならなければ。そうしたら、これは本当になる。だから、キリストは、

「我を食らえ、我を飲め」

と言ったんです。頭で解釈して

「解るの解らないの、どうのこうの」

なんていう世界ではないということです。大体、聖書に対する態度がみんな普通は——教会の悪口を言うわけではないけれども——ずれているものだから、いつまでたっても「ダメです」。

私も無教会で長いこと——先生方は一流の先生ですから、

「今日はつまらなかった」

という日は一日もないんですよ、正直。確かに私は学問的にも、あるいは心の上でも満足して帰ってきた。内村先生、藤井先生、塚本先生はみな一流ですから——けれども、

「本当に聖書の文字を喰らっていたか」

ということになると、まだ手前だった。先生方は食らっていたでしょうけれども、私はまだ手前だった。しかし、

「本当に食らえ」

なんていうことを先生方は言ってくれなかったね。そこらに多少、無教会の限界があったかと思う。

文字を読んでいるうちに、その現実の中に自分が入ってしまったて、そしてもうたまらなくなってしまう。それが、

「本当に食らっている」

という世界です。その現実に即して、即、自分がそのドラマの中の一人になってしまう。

「へえ、ダビデはそんなに歌いましたか」

なんてではダメだよ。ダビデという人と一緒に、若草の野に今いなくてはいかん。憩いの



汀にいたくはないかん。ダビデと一緒に死の陰の谷を渡つて、

「汝共にいます」

という所を現実に受けとりながら読んでいなくてはいいかん。

だから、4 節なんかはそう簡単に先へ進めないんです。これを本当に身につけて先に進むためには、そんな30分やそこらではダメだよな。しかし、簡単な人はすぐ即刻入りますけれどもね。

「よしつ、私はもうこの現実を身につけたぞ。詩篇23篇はわが歌である」

と。これが本当に「わが歌」にならないければダメですよ、

「23篇という有名な歌があったか」

くらいでは。「詩篇で第一の歌は何か」と問われると、答えて「それは第23篇だ」という答案は書くよ。答案を書いたつてダメだよ、そんなのは。

「私がその23篇でござる。自分自身が23篇である」

ということが言えなくては。

●ロングフェローの「サムオブライフ」

ロングフェロー (Longfellow 1807 ~ 1882) の「サムオブライフ」 (A Psalm of Life) 「人生の歌」というのがある。私はこれを1932年に訳した自分の訳がありますから、それを読みます。中学の英語の本には昔は出ていたけれども、今は出てないそうだね。ダメだよ。英語の先生はこういう歌は中学生に教えなくてはね。プリントして暗記させなくては。

言つ勿れ悲しき調べに、

『人生は樺花一朝の夢！』と。

魂魄まどろめば死し、

見ゆるところは真相に非ざれば。

人生は眞実、人生は厳粛。

瑩六はいかで終結なるらん。

『塵より出でて塵に還る』

そは靈魂の謂にはあらず

楽しみも悲しみも

わが命数にも道路にもあらず、

路は実存にあり、明日の我は

今日の我を乗り越えてゆく。

芸術は劫く時世は流る。

われらが心臓縦し堅くして勇むとも、

音もなき鼓の如くつねに奏つ

奥津城に到る埋葬の曲を。

此世の戦の広き場にて

人の生命の露宮の野にて

黙しつゝ駆らるる牛馬たらざれ、

戦闘の丈夫たれよ！

楽しからん後の日をたのむ勿れ！

逝きし死をして死を葬らしめよ。

働け！ 働け活ける今！

衷には心情あれ、上には神在すなり！

Heart within, and God o'erhead!

という有名な言葉です。ハッ！のところは、

Trust no Future, howe'er pleasant!

Let the dead Past bury its dead!

Act—act in the living Present!

Heart within, and God o'erhead

という文句です。

偉人の生涯を想ひては

われらが生を崇高になし、

離別に臨みては我らがあとに

足跡をとどめん、時の砂漠に。

足跡、そはおそろく兄弟の、

人の世の厳かなる海原を漕ぎゆきし人の。

これを見て寄るべなき難破の者は

再び勇みて振ひ起つらん。

いざ我ら起ちて為さむ、

万難に耐ふる心根をもて

愈々達しては愈々追求め、

働くを学び、待つを学ばん。

という。最後の文句はなかなか力強いですね。

Let us, then, be up and doing,

With a heart for any fate;

Still achieving, still pursuing,

Learn to labour and to wait.

これもなかなかいい詩ですが。



Life is real! Life is earnest!

And the grave is not its goal;

"Dust thou art, to dust returnest,"

Was not spoken of the soul.

人生は眞実、人生は厳粛。

瑩穴はいかで終結なるらん。

『塵より出でて塵に還る』

それは靈魂の謂にはあらず

人生は真剣で墓場がゴールではないと。

「塵より出でて塵に還る」

という聖書の文句の中にありますけれども、それは魂のことを言っているのではないと。しかし、単なる未来を頼むなかれ。現在が大事だと。

Act,—act in the living Present!

働け！ 働け活ける今！

と。本当に現在を生きるものにする人は永遠を持つ人なんです。あるいは、永遠を持っている人が本当に現在を活かす人なんです。我々がこの永遠の今を生きているわけです。一日が即ち一生であって、いやいや、この単なる地上の一生ではない。もういつ死んでも絶対に死なない。これが本当の我々の、キリストの生命というのは――

「キリストと一緒にいらつしやるから恐れない」

という言葉はありますけれども、ただそれだけではダメなんですよ――もうひとつ先へいくと分かるから、そのことが。

●わが酒杯は溢るるばかり

それで今度は、煉獄なんだな。今は天国から地獄へ来て、今度は煉獄。ダンテは、「地獄・煉獄・天国」と言いましたけれども、この詩篇は、天国・地獄・煉獄と歌っている。煉獄は何かというところから。

あなたはわが眼のあたりに筵を設け給う、わが諸々の敵を前にして。

人生には「敵」がいっぱいいる。大体、自分の中にも敵がいる。それから、いろいろな環境において。

「男は外に出ると七人の敵がいる」

なんていう言葉もあるけれども。とにかく、いろんな病気も敵だし、運命の敵もあるし、人間の敵もあるし。……要するに、いろいろ敵があるが、しかし、

「敵を愛せよ」

と、キリストは言われた。「敵を愛する」というのは、申し上げている通り、何も敵を可愛



がるのではなくて、敵は「この野郎！」だって結構ですけども、「この野郎」を背負ってしまう、担ってしまうわけです。敵を荷ない上げるだけの力がある人が本当の勝利者なんだ。敵を救い上げる人が本当の勝利者です。傷ついた敵を殺すのではなくして、助けてやる。これが本当の勝利者である。昔の武士道はそうだったよな。今は、本当の武士道はなくなってしまった。

とにかく眼のあたりに悠々と宴を供えてくださる。敵前の筵という。そうかというとい気になって酒飲んで負けてしまうわけではない。そういうことを言っているのではない。

あなたはわが首を油で滴らせしめ給う、わが酒杯は溢るるばかり。

この敵前の筵は一体どういう筵かと思ったら、

「わが首を油で滴らせてくださる」

もちろん、この表現は豊かな饗宴のことを言っているんでしょけれども、その奥は、その霊的な意味、内容というものは「油」というのは神の霊を「油」で象徴するわけです。

「油注がれたる者」

というのは、

「神の霊を受けた者」

です。「キリスト」という言葉はそういうこと。「メシヤ」とか「キリスト」は「油注がれたる者」ということです。

神霊、神の霊、これは我々においてはキリストの霊です。キリストを通した神の霊――何と言っても構わないですが――御霊のキリスト、キリストの霊です。旧約では「神の霊」ですね、まだキリストは出ていませんから、キリストは天界に隠れているから。

人は神霊を注がれたる者です。本来は神霊が止まっている者だからね。「ひと」という字は「霊が止まる」という。「霊止」と読む。これくらい素晴らしい言葉はないですよ、他に。

「私は本当の霊止である」

ということとは、

「神の霊が止まっている者であるぞ」

ということ。神・仏の霊が止まっていけないような仏教徒だのキリスト教徒がいっぱいいるから、今の20世紀はダメになってしまった。だから、

「私はプロテスタントでもカトリックでもない。私はキリスト直結だ」

と言うのはそういうわけです。

カルビン「ジャン・カルヴァン (Jean Calvin 1509～1564) フランス出身の神学者」は『キリスト教綱要』『プロテスタント神学の最初の組織神学書』という素晴らしい本を書いて、その中の特に聖霊の所は素晴らしい。カルビン自身も異言の体験のある人ですから、カルビンはいいんだけど。カルビンの大きな間違いは、とにかく敵を焼き殺したり、ああいう宗教戦争みたいなことをやった。あれは大きな間違いです。ルッターさんもいいんだけど



もね。どうせみんな人間はよくたって、必ずまたダメな点を持っているんだよな。大事なのは、本当にこの神霊が止まっていること。私なんかは、

「ダメだからこそ、神霊が止まってくれなければどうにもならん」

というわけです。神霊がなくても立派な人があるけれども、それで済むならいいよ、それでも。けれども、本当は済まないんです。人間はこの神の霊がこなければ、本当は済まないようにできている。だから、

「誠に済みません」

と言えばいいんだ（笑）。

この詩篇で一番大事なところは実はここなんです。

あなたはわが首を油で滴らせしめ給う、わが酒杯は溢るるばかり。

私という存在に神霊を注いでくださる。「わが酒杯」というのは、私という酒杯です。私自身は酒杯なんです。

「私という酒杯があなたの油で満ち溢れる」

と。こっちは葡萄酒だけれどもね。葡萄酒は生命を表す。

「あなたの霊と生命でもって、霊的生命で、私はもう溢れるばかりだ」

と。泉と同じで、決して尽きることがない泉である。不尽の泉である。不尽の油である。尽きざるところの油です。これが敵前の筵の内容ですから、絶対に負けない。

私みたいなやつが、なぜこんなに力がやってくるかというと、ただこれだけなんですよ、油だけなんです。さっきの法然ではないけれども、法然にとっては、「南無阿弥陀仏」が何よりも大事なものの。彼は、

「南無阿弥陀仏」

と称う時にお釈迦さんと一つになる。

「南無といえば阿弥陀きにけり一つ身をわれと言わん仏とはいわん」

「南無」と言ったら阿弥陀さんがやって来た。この一つ身を私と言おうか仏と言おうかと。

「仏と自分とは一つである」

という。それだけの「南無阿弥陀仏」なら、仏教でいいですよ。それだけの「南無妙法蓮華経」なら、「南無妙法蓮華経」で結構ですよ。私は何も

「キリスト教に來い」

なんて言っているのではない。とにかく、

「本ものの世界に入ってくれ」

というわけです。

「何々でなければ救われない」

なんていう話ではない。神さまは誰を救うか全然わからない。とにかくしかし、私たちに
おいては



「このキリストが驚くべき存在で、また絶対無条件の救いの実体だから、これを告白せざるを得ない」

というだけのはなしです。

この第5節は、人生のどんな嵐の中も、どんな困難の中も、どんな四方八方からの敵を受けようが宮本武蔵みたいなものだ、こっちは。無剣の剣という。剣なんかいらないう霊剣というやつだ。霊の剣だから。そういうわけで、我という酒杯は、

「わが酒杯は溢れるなり」

と。「どんな酒杯だろうか」と調べたつてダメですよ、自分が酒杯にならなければ。

6 誠に善福と恩恵とが私を追う、

私を追っかけるという。追求する。「さいわい」というのは「善福」と書いたらいい。恵み、恩恵です。

わが生命の日のある限り。

旧約の世界では、「日のある限り」というのは地上の生涯のことをいう。「わが生命の日を更に乗り越えて」というわけです、永遠に。

かくて私はヤーヴェーの家に住むであろう、日に日が続き果てるまで。

「ヤーヴェーの家」というのは「神殿」のことですけれども、こんな句はなくなつていい。こんな句はいらない。ヤーヴェーというものを自分の家にするか、自分がヤーヴェーの家になればいい。何も家が必要ではない。キリストは自分のことを

「活ける神殿だ」

と言った。キリストが本当の神殿であります。パウロが

「我々自身が聖霊の宮である」

と言った。我々自身が即ち「宮」でありますから、お宮参りする必要も何もない。これは、

「日に日が続き果てるまで」

で、もう歴史の終わりに至るまでである。人生の歌でありながら、これは本当に大きなそういう内容を持つている。天国は天国として歩ける。地獄も大丈夫。煉獄も大丈夫。

「人生の天国、地獄、煉獄、何でもござれ。いかなる時にもそれに本当に処していいくぞ」

と。これが本当の天国を自ら現じていく人の在り方。これが23篇です。ヤーヴェーをわが牧者とし、ヤーヴェーの霊を、キリストの霊を自分の生命としている霊止はこの詩篇を

「わが詩篇」

とすることが出来るわけです。おわります。

(讃美歌527番「わがよろこびわがのぞみ」)

